

1 まえがき

前回の報告書から、はや2年近くが経過しており、驚き半分、恥ずかしさ半分です。博士号取得までの概略から述べさせていただきますと、まず博士論文を提出したのが2017年9月、ちょうど4年目の終わりの月です。そこから試験官のスケジュールを調整し、口頭試問が行なわれたのが12月の下旬、それに合格して修正をし、最終稿を製本して、今月大学に納めました。

最後に書いた報告書が2016年7月付けとなっていますので、書き上げまで結局1年以上かかり、指導教官との確認プロセス、口頭試問のスケジュール調整、学位委員会の承認プロセスなど、予想しているよりも多分に時間を要することが分かりました。この辺りにつきまして、後学の方の参考になれば幸いと思い、報告させていただきます。

2 落とし穴

まず、昨年1年間（博士課程4年目）、博士論文執筆が非常に滞ってしまいました。理由は主に下記の2点であると自省しています。

- 燃え尽き症候群（スランプ）
- 指導教官との連絡

それぞれの原因に詳しく言及する前に、背景の話としましては、一昨年でデータ収集と粗方の分析を終え、昨年1年間（博士課程4年目）はケンブリッジを離れ半年ほど東京に住み、コンサルティング会社でのインターンシップや、別の大学の研究プロジェクトの手伝いなどをしていました。残りの半年は2、3ヶ月のスパんで、日英を行き来しながら執筆をしていました。

さて、執筆停滞の一つ目の要因として、率直に、文章が書けなくなりました。データ収集まで終えて気が抜けてしまったのか、モチベーションの問題なのか、環境の変化なのか、もしくはその全てか、筆が全く進まなくなりました。また、無理やり書いたとしても結局は消して、書いては捨て、を繰り返していました。これは精神的にもだいぶ効きました。浮かぶアイデアに対し自信も無くなり、自分の研究の意義や方向性についても懐疑的になってしまいました。これは非常によろしくないです。プレッシャーにより焦燥感にかられ、余計に書けなくなる、また寝付きも悪くなり、翌日のパフォーマンスも低迷する、という負のループに陥ってしまいました。また、指導教官からも全然進んでいないじゃないか、と催促も来たり、自分の作業量と成果（アウトプット）が伴わない時期は本当に辛かったです。

最後の点に関し、二つ目の要因として、指導教官との連絡も影響していたかと思料します。3、4年目に入り、他の研究グループの友人と博論について話すことも増え、互いの指導教官について比較議論することもしばしばありました。その中で、私の指導教官は学生への返答（メール）が非常にルーズであると分かりました。人柄は大変良い方で、研究のアイデアも素晴らしいです。しかしながら、この部分の確認が得られないと、後の項が書けない、というような内容への返答が遅かったり無かったりするの是非常に困りました。同期学生も返信については困っていたので、

これは彼の性格なのかなと思います。教授陣が多忙なのは重々承知していますが、その中でもきちんとしている先生は、学生の1章分の草稿に非常に細かなチェックを入れて、2日以内には返信すると伺いました。博士課程学生への返信は指導教官の義務に入っているようで、ここを疎かにする場合は、大学へ相談することも大いにありだそうで、もし今後同じような方がいましたら、まずは指導教案に直接話す、それでも改善されなければ大学に相談する、という早めのアクションをお勧めします。

3 スケジュール

上記の理由から、書く → 消す → なんとか書く → 指導教官の返事待ち（何度もせつつく） → 修正 → 書く → … というループで、結局提出まで1年と数ヶ月かかってしまいました。

そしてそこから口頭試問が組まれるまで、3ヶ月と、こちらもまたとても時間がかかってしまいました。口頭試問は、通常論文提出後1月程度、遅くとも提出後2ヶ月以内に開催されるのが基本だそうで、3ヶ月は随分待たされた方です。教授陣は多忙極めるので、スケジュール調整が困難なことは理解しますが、もし卒業後の就職のスケジュールなど決まっている方がいたら、この辺りは学部オフィスときちんと相談した方が良いかと思います。

博論提出から口頭試問までの期間ですが、大学のことにに関してやることは特にありません。とは言え、私にとってはこの期間を学術誌論文執筆と就職活動に当てられたので、結果的には良い塩梅でした。この期間に学会誌に1本投稿し、他数本のアイデア作りもできました。また、就職活動も、運良く開始から決定まで比較的すんなり行き、本月（2018年4月）より、富山国際大学現代社会学部にて、マーケティングの講師に就任しております。

4 悪環境の突破口

筋トレです。そして健全な生活。早寝早起き、適切な食事、筋トレと運動、遊び（趣味）への没頭、この4つの単純なことが、何よりも大きな効果を発揮します、私が博士課程の4年間を通じて辿り着いた人生の秘訣です。単純明快であるにも関わらず、ほとんどの方がきちんと実践できていないのではと推察します。

去年は移動続きとストレスから、私自身これらのサイクルに取り組みず、体重は8kg増加、体の緩みは精神・知性の緩みにも繋がり、結果として上記のように苦しむこととなってしまいました。ストレス太りとは言いますが、個人的経験則ではストレスで直接太ることはないのではと推察します。問題は、ストレスにより適切な時間に、十分な量の睡眠が得られなくなる事です。これにより、起床した瞬間から気だるさを感じ、筋トレも勉強もする気が起きなくなる、食事も味気なくなったり、脂っこいジャンクフードを欲してしまったりというような身体になって行くのではと思います。一昨年は、日の出前に自然に起床し、その日の一番大きな仕事を片付け、日の出を横目にランニングをし、きちんとした朝食を作って食べ、漫画を読みながらお茶で一服するのが8am頃でした。この時の自分は何でもできる感は凄まじいものがあります。これらの点に関し、是非ともご紹介したい書籍が3つあり、本項の締めめに替わせて頂きます。これらを読んでお

けば人生はやっていけます。どの研究書よりも役立つバイブルです。

- 『筋トレが最強のソリューションである』(自由国民社)
- 『週間少年ジャンプ』(集英社)
- 『ぐらんぶる』(講談社)

5 余談

最後になりますが、少しでも広く世界を見聞してきた学徒として、現在の日本のアカデミアと産業界に思うところを述べさせて頂きたいと思います。先日寄稿させて頂いた「重本祐樹. (2018). 日本でのアカデミア就職. *かけはし (米国大学院学生会 Ed.), Vol. 37.*」に同内容が掲載されているのですが、多方面で発信したい内容でしたので、上記寄稿の一項をそのまま転載しております。

ケンブリッジの所属ラボの教授とお茶をしていた際、政府や国際機関の製造業へのポリシーや予算配分に即さない研究がほとんどできない、とこぼしていました。すなわち、長期的な視座での研究、純粋な学問としての研究が進まないということです。これは私も日本のアカデミア、および産業界のイデオロギーに感じていた事です。端的に言えば、今の日本企業や政府が求めているのは問題解決の“方法”であって“方法論”ではないのです。どこかの寓話ではないですが、不漁な釣り人が、隣にいた熟練の太公望に、その釣り竿を譲ってくれ(しかも限りなく安く)と言っているようなものです。その釣り名人の釣果の背景にある釣り竿の構造や釣り方のテクニク、また気候条件や魚の習性などへの知識や経験則と言ったものを無視し、その結晶である釣竿(結果)だけ欲しいというわけです。これはひとつの戦略の在り方として否定しませんが、長期的な視野に立つのであれば、同時進行で自分たちの「釣り方法論」を探究すべきなのです。しかし、その方法論に目を向ける事なく、その結晶としての釣り竿を手に入れた時点で満足してしまっている、というのが私から見た日本のアカデミア、産業界の現状で、当たらずも遠からず、と思量しています(もちろんこれに当てはまらない方々も居ますが)。

したがって、仮に一時的によく釣れる様になっても、少し条件が変わっただけですぐに不漁に逆戻り、更に悪い場合には、その釣り竿を使いこなせずに不漁のまま終わり、騙されたと嘆く、といったことも十分に考えられます。すなわち、状況を自力で打破する知の蓄積がないのです。とりわけ、デザインに関しては、その言葉のトレンド性のみが先行してしまっていると痛感しています。(日本に限った事ではないですが、日本は特に顕著かと思います。)こうした現状を少しでも改善することに貢献できるよう、(少なくとも)向こう数年間は拠点を日本に移し、デザインマネジメントの研究、実践、教育に邁進して行く所存です。しかし、競うフィールドは世界で。拙稿を読んで頂いている皆様には、是非もっと外の世界を見て、体感して欲しいです。世界には見た事も無い景色も、美味しい物も、チャンスもごろごろ転がっています。

さて、以上で博士課程取得の報告を終えさせて頂きます。学位授与式は夏に出席予定です。今までご支援、ご声援くださった皆様に、感謝を込めて。Σd(・ω・)

2018年5月 重本祐樹